異世界での日々

異世界に逝きたい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界での日々

【Ｎコード】
Ｎ１１３４ＢＡ

【作者名】
異世界に逝きたい

【あらすじ】
これはただの作者の暇つぶしのファンタジー、読んでくれたら嬉しい。ただそれだけの展開が遅いストーリー

プロローグ?

『お兄ちゃん、僕のこと忘れないでね』

突然妹は変なことをいってきた。

散らばったトランプを片付けている手が止まる。

『はっ!!、どうした突然?』

『何でもないよ。そうだ、トイレ行ってきてくるよ』

慌てて出て行く妹の後ろ姿が、もう二度と会うことができないとは、この時に気づくはずもなく、しばらく戻ってこない妹を探しにいった。

すると、夕食前の料理をしているお母さんに、

『お母さん、明梨見なかった。』

『明梨って誰のこと?、お人形?私今忙しいからあとでね。』

『何言っているんだよ、明梨だよ、妹だよ、うわぁぁぁ〜』

僕は次の日精神科に連れていかれた。

これが僕の１０歳の記憶

プロローグ？ーそして始まり

あれから８年

俺は普通の少年になりました。
普通に寝て起きて、顔洗って、ご飯を一人で食べて、歯磨いて、学校行って勉強して、休み時間には本読んで、昼に一人でパン食べて本読んで、また勉強して、一人で近くの本屋によってから帰って、テレビ見て、風呂はいって寝るの普通な暮らし。
それが俺のつまらない生き方。

でも今日は違った。
いつもどうり、一人で本屋によってから帰ろうとした時に、黒猫に声をかけられた。

『にゃー、君君その腕時計を見せてほしいのにゃー』

突然のことに思わず鞄を落としてしまう。
気がつけば人の姿がなくなった。今は商店街にいるのにお客も店員一人誰もいない。

『えっ、』

ものすごい速さでＢダッシュをして逃げ出した。

つもりだった。さっきから同じところを走っている。

『無駄だにゃ、それより見せてくれるだけでいいんだにゃ。』

無駄に走るのも疲れる。だから見せることにし、腕時計を外し渡す。
猫は立ち上がり受け取った瞬間

『なるほどにゃー♪』

猫は尻尾を振り振りしながらすぐに腕時計を返してくれた。

『今から君に話したいことがあるんだにゃー♪君君異世界興味ないかにゃー』

正直、今の状況にビックリと同時に、妹がいるかもしれない。興味がある。

『あるみたいだにゃー♪』

『そこに明梨がいるかもしれない。行きたい』

『明梨ね、前に魔力暴発を起こす可能性がある者を何人か送り届けたことがあるから、多分いたと思うにゃ。』

『行く、いくよ、そこに連れてけ。』

『了解にゃ♪でもその前に話しを聞くにゃー、異世界に送ると地球

の関わった記憶と最低限の者が消えるにゃー。君には魔力があるみたいだから、レジストしたみたいなのにゃー。ここまではいいかにゃー？』

『あぁ、妹に会いたいから早くしろ』

『そう焦らないでも行かせてあげるにゃー♪まずは、今から行く世界は魔法があると同時に魔物とかいるにゃー。君には巨大な魔力がある代わりに放出できないみたいだにゃー。だから、今日は偶然見つけたのは奇跡なんだにゃー♪それより、送っても魔物にあってすぐ戦えず死ぬってことないように”記憶の本”の切れ端を与えるんだにゃ。つまり君には、あまり使われないこの”強化魔法の書“のどれかの切れ端をあげるんだにゃー。』

いつの間にか猫の前に無数の本が浮いてありさらに数本の本が消え8冊の本だけが残る。
これが魔法だろう。

『この紙に手を当ててほしいにゃー、いつもなら水晶にも触ってもらうのにゃが、さっき身が壊れてないのが不思議なくらいの魔力を感じられたから割られると経済的に厳しいからやらないにゃー』

猫は自分の毛を一本抜き、それは一瞬のうちに紙になって渡してきた。
言われた通りに触ってみたが変化がない。

『にゃにゃ無属性ですかにゃー♪珍しいのにゃー、初めてなのにゃー♪ならこの本なのにゃー。これを受け取った瞬間君は後戻りで・・・』

やっぱり、浮いていた本が一瞬のうちに消えて一冊の本だけが残る。
猫はそれを千切り俺の前に見せてしゃべっている途中に瞬間それを取った。そして紙は光になって俺の体にはいってくる。

頭が急に痛くなり、俺は気絶した。

『・・・そう、分かったにゃー♪一名様ご案内～だにゃー♪』

これから俺の新しい人生が始まった。

1日目ー目覚めたら

目を覚ますとそこは知らない木製の部屋の中のベッドに寝ていた。起き上がろうとすると、何かの皮でできたブカブカの服を着ている。誰かが着せてくれたのだろう。

部屋を観察してみると、テーブルに置いてあるコップと花瓶、ロウソクだて以外は木でできている。扉から一番奥の端に今寝ていたベッドがあり、その隣に机と丸椅子があり、机には土を練ってできたシンプルな水の入ったコップと花瓶とロウソクだてがあり、花瓶には見たことがない黄色い花がつんである。あとは、ベッドの足の方に大きさが違う同じ作りのタンスが二つ並んで設置されているだけの必要な物しかなさそうな部屋だ。

そして立ち上がり水を飲んでから部屋から出る。そこには、キッチンで調理をしている女性の服を着た筋肉質な黒人のおっさんがいた。

『あら?、もう起きたの?』

変なおっさんが料理をしているのを止め、声をかけてきた。この人は多分命の恩人だろう。

『あっ、はい。え～と助けていただいてありがとうございます。』

『思ったほど元気そうじゃない。こういうのって2～3日目覚まさないと聞くけど1日で目覚ましちゃうのね。』

『君、私の管理する草原に裸で倒れていたそうなの。その服は私の忘れたい過去のおさがりなのよ？。ちなみに発見者は今はギルドの依頼の途中だったみたいだからすぐにどこか行ったわよ』

・・・どうやら俺は恥ずかしい格好で倒れていたみたいだ。あとその格好で可愛い声は止めてほしい

『すいません。服やベッドを貸していただいて・・・』

『いいのよ？、それにもうその服着れないからあげるわ。それより、あなたのお名前は？』

『・・・・・・っ！！』

自分の名前が出てこなかった。覚えているのは、知らない女の子の顔と魔法の使い方だけ、それ以外は思い出せなかった。

『・・・・・・そう、なら私の家で一緒にしばらく暮らさない？いい考えだと思わない？』

突然名前も知らない変なおっさんにこんなことを言われた。でも俺は何故か知らない女の子を今すぐに探しにいきたい気分だった。なので、

『すいません、え～と、「アルシュテーラよ、アルさんと呼んで、」アルさん、俺にはそれはできません。今すぐにでも今覚えている女の子を探しにいきたいんです。』

『そう、分かったわ。無理に止めることはできないもの。でも今は体を休めた方が良さそうよ。ここらへんは低級の魔物しかいないけ

ど、魔力もないアナタにもしもがあったら嫌だから、その子を探しに行くのはもう少し待ってね。今は寝てなさい。』

突然眠くなってきて、体に力が入らなくなってきた。そして俺は倒れた。

3日目?ー出会い?

気がつけばまた同じ部屋で寝ていた。

部屋の変わっている所は花瓶の花が紫色の花になっていることとベッドの隣に布団が敷いてある。

アルさんは、ここで寝ていたのだろう。お腹が減った。

部屋から出ると、アルさんはいないみたいだ。

テーブルの上にパンと食器、メモが置いてある。

メモには

鍋にスープがあるからご自由に、あと地図にある道具屋で働いているからこれたら来てね?

裏には手書きの地図がかかれており、少し分かりにくいが多分いけるだろう。

それよりお腹が減ったのでスープを取りに行ったら赤い石がついているコンクリートでできているのに鍋が置いてある。

赤い石が多分、コンロのスイッチだろう。だからいじるわけにはいかないと思い、スープをいただく。

スープは黒豆が浮いていて芋が沈んでいる、赤いぬるいスープだ。

『いただきます』

硬いパンをスープにつけながら食べると食べやすく、スープはトマトの風味のさっぱりしておいしい。
たぶん食材は地球とにているか、全く同じかもしれない。

『ごちそうさん』

パンとスープを食べ終わり、道具屋に行くことにする。

外に出ると此処は村みたく同じ作りの家が建っている。空を見るとまだ空が明るいのに、太陽の隣に月がみえる。
さらに村を囲うように仕切りがあり、所々に黄色い光輝いている何かがついてある。
あれは、結界みたいな物だろう。

『坊主起きたのか、お寝坊さんよ』

村の入口の門番であろう鎧を装備し、２つの斧を腰につけたオッサンに声をかけられた。

『あっ、はい、すいませんが、この道具屋に行きたいのですが、』

『それなら、娘に案内させっから待ってな。』

そう言いながら、近くの家に入っていく。

しばらくして出てきたのはオッサンと、そばかすがある長い茶色の長い髪ある自分の肩までの背の小さい少女が出てきた。

『初めましてダス～、ワタス、“ピノコ“と言いダス。よろしくダス～』

何だろう、この世界の住人は普通な人はいないのだろうか。

『あの～、そんな見つめないでほしんだな～、照れるダス～』

（いや、見てないから）

と心で思いながら、

『すいません、ピノコさん。道案内をお願いしたいのですが・・・』

『ガハハハハ、堅苦しいな。坊主名前は何ていうんだ。』

『・・・すいません、名前が思え出せないので・・・・・・』

『なら“ナナシ“だな坊主。俺様の名前はギルスタ・レイチル。“ギルスタ“だ、よろしく』

少しムカついたが、その後、村についての説明をピノコに紹介されながら、アルさんが働いている道具屋についた。

他の村人にも声をかけられたが、村人ＡＢＣなので忘れた。

3日目?ー道具屋

『此処が目的地なんだな～、ワタスようがあるダスから、一緒なんダス～』

後ろで何か言っているピノコを無視して入口に入るとオカマ・・・アルさんがリンゴをコロコロ転がしながら、店番をしていた。

『いらっしゃい、そろそろ目覚める頃だと思ったわ。それっ』

そう言いながら、リンゴを投げてきた。

『ありがとうございます。すいませんが・・・・・・』

『アナタは、もう旅に出ようとしているの?あと、ギルスタさんにあだ名つけられなかった?』

『父さんは、いつも町の人以外に来た人に必ずあだ名つけるダス～、有名なんダス～、人気があるダス～、モウ行くダスか?』

（もじもし）

たぶん、馴れ馴れしくて有名何だろう。

あと、ピノコや何故さっきから後ろで変なダンスしている。キモいぞ

『今すぐに行きたいのですが・・・・・・、アルさんにお礼をしていないので、』

『あら、律儀なこと?ならアナタ戦うことはできる?始まりの草原ならギングスライムの縄張りに入らなければアナタでもお城までい

けると思うの？？コレ届いてきてほしいのよ。』

そう言いながら、懐から封筒を取り出す。

それは丸の中に大きさの違う水滴が落ちていくデザインの判子がおしてある封筒だった。

『あの～、ワタスも行っていいだすか？』

（もじもじ）

『元からそのつもりよ？、ギルスタには、もう言っているのよ。そうそう、アナタにプレゼントよ、その服とアナタが寝ていた一番大きいタンスに、一番下に剣があるからそれ持っていていいわよ？あと、これもあ☆げ☆る？』

そう言って棚から少し穴のあいた鞄を投げてきた。

中には、緑の液体の入ったビンと、食料が入ってある。

どうやら強制的にピノコのお供のお使いが始まるみたいだ。

何か後ろでピノコが（アワアワ）

また変なダンスしている。

しかし、アルさんとピノコの二人がキモいことについて皆さんどう思う。

無視ですか・・・

『わかりました。』

『でも、今から行っても夜になるから明日の朝に行ってね？

それじゃ、ピノコちゃんにようがあるから、男は出て行ってくれない？』

アルさんも男だと思いながら俺はお店を出て行った。

それから、しばらくリンゴを食べながら村を散歩してから、アルさんのお家に帰った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1134ba/

異世界での日々

2012年1月4日01時49分発行